

都市河川空間におけるアメニティー施設の利用実態とその評価

九州大学工学部 ○学生員 丸山 剛史

九州大学工学部 正 員 平野 宗夫

九州産業大学工学部 正 員 山下 三平

九州大学工学部 正 員 坂本 紘二

九州産業大学大学院 学生員 金谷 文明

1.はじめに

近年、都市河川空間が、人々の生活に潤いを与えるものとして注目されるようになり、親水機能や景観性を重視した設計が具体化されている。本稿においては、このような都市を流れる河川（那珂川ならびに室見川）に造られたアメニティー施設の事後的評価の試みとして、利用実態を把握しようとしたものである。

2.調査方法

調査は10月下旬より12月上旬にかけて、アメニティー施設におけるビデオ撮影と利用者に対するインタビュー調査によって行った。著者らの調査によると、那珂川の中洲地域、室見川の新室見橋付近及び地下鉄室見駅付近が代表的なポイントであるといえる。¹⁾そこで、調査対象を那珂川の出会い橋（間隔約15m）、同じく城山ホテル前の那珂川遊歩道（同約20m）、室見川新室見橋付近の河川敷公園（同約30m）、同じく室見駅付近の遊歩道（同約30m）の4箇所とし、それぞれにおいてビデオ撮影を月曜または火曜、金曜および日曜日の午後3時から午後8時までとインタビュー調査を土曜日と日曜日の2回、各地点30人ずつに行った。インタビュー項目は①回答者の属性（性別、年齢、住所）②利用実態（利用頻度、利用目的、利用人数、利用開始時期）③満足度（施設に対する感想と提案、他の施設との満足度の比較）等である。なお、調査地点に選んだ出会い橋は、天神中州間の回遊性を高め、待ち合わせと出会いの広場となり夜の景観を演出する橋として、また那珂川遊歩道は、市民が水辺と親しめる親水空間および都心と海とを結ぶ快適な遊歩道として、さらに室見川遊歩道は、室見川河畔緑化整備事業において、室見川の堤外地高水敷をジョギングが楽しめる緑地とし、堤内地を川沿いに河畔公園として整備されたものである。

3.アメニティー施設の利用実態

撮影したビデオの映像から、各地点の遊歩道を通行する人を通過者と一時滞在者に分けた。平日と日曜日の一時滞滞者および通過者の時刻による人数の変化を示したものが図1～図4である。

平日には出会い橋で一時滞滞者は4時頃から増え始め、6時から7時にピークがあり、河川敷公園でも6時から7時にピークがあるが、駅付近では4時から5時となり、ピークの時間にずれが見られる。（図1）

また、日曜日には、出会い橋では5時から8時に増加傾向を示すが、河川敷公園では逆に3時から8時において減少する傾向を示す。出会い橋が、一般的な公園に見られる様な昼に利用者が多いパターンとは異なり、むしろ夕刻から夜にかけて留まる人が多いことを示している。（図2）

ところで、各施設の通過者を見ると、出会い橋、那珂川遊歩道とも3時から7時にかけて増加傾向があり、6時から7時にピークをもつパターンを示している。これはビジネス街のオフタイムに利用する者が多いためである。しかし、室見川の河川敷公園においては、明らかなピークのパターンが見られない。（図3）

一方、図4の日曜日の通過者を見ると、出会い橋、那珂川歩道で

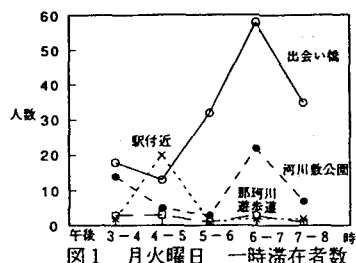


図1 月火曜日 一時滞滞者数

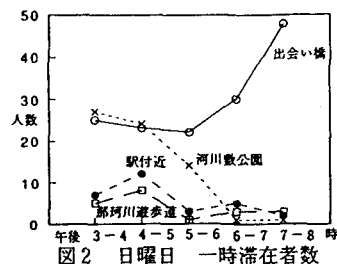


図2 日曜日 一時滞滞者数

4時から5時で多いが5時から8時で減少し、河川敷公園も5時以降の減少パターンを示している。しかし、駅付近の河畔公園の通過利用者は少なく、一時滞在者と同様に時刻による変動がない。

図5では、室見川において、施設の利用者数を、施設の利用者数と側道の通過者数との和で除したものを利用率として、時刻毎の変動パターンを示している。上流側の河川敷公園と比べると、駅付近の利用率は低く、また曜日の違いによる変動パターンも対照的なものになっている。駅付近はその施設の側道を通行する者が多く、整備した遊歩道が必ずしもよく利用されていないことを示している。

ここで、インタビュー調査の集計結果を示した表1から、那珂川2地点には、遠距離から訪れる人の低頻度の利用が多いこと、利用目的は、出会い橋では「通過」が、遊歩道では「休憩、時間待ち」が多いこと、また室見川では比較的川に近く、高い頻度の利用者が多く、「散歩」の目的が半数以上を占めていることがわかる。また大濠公園と比べて、室見川河畔公園の方がより好まれていることも顕著である。

なお、施設に対する感想や要望を尋ねた結果によると、那珂川両地点で「水が汚い」を指摘した者、また那珂川遊歩道においては「ゴミが多い」を指摘した者が、またさらに室見駅付近では「木陰が欲しい」を指摘した者が比較的多かった。

4.おわりに

出会い橋は、中州天神間を結ぶ道路の橋として通行量が多く、また一時滞在する者も、平日には夕刻にピークがあり、休日には夜間に向かって増える傾向が顕著であり、設計趣旨通りに利用されていると言える。那珂川遊歩道は、バス停や地下鉄の駅、映画館等が近いため、通過する歩道として、また待合せの暇な時間にくつろげる空間として利用されている。室見川の特に河川敷公園は、沿線住民にとって身近な公園として暇な時間によく利用されていることがうかがえる。なお、駅付近の河畔公園は側道の通行者が多いのに比べて、施設利用者が限られた形になっている。

このように、アメニティー施設は、背後地の立地条件や側道の条件を含む、地点毎の特質によって利用率や利用パターンが異なっており、その様な特質を見極めた、さらに細やかな施設の整備が望まれる。

なお今後は、同じアメニティー施設の季節による利用実態の違いや注目されるスポットについての調査をしていきたい。

参考文献 1) 山下他：土木学会第47年会年講概要集 p p.

4-5 1992.

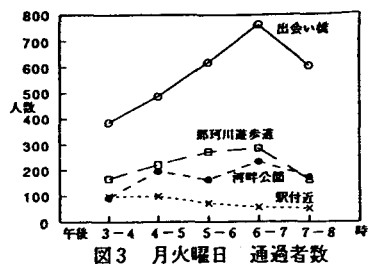


図3 月火曜日 通過者数

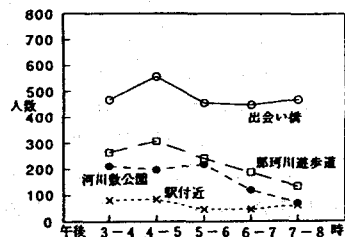


図4 日曜日 通過者数

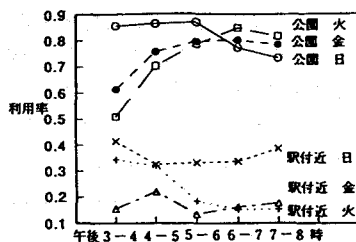


図5 利用率 室見川

表1 インタビュー集計結果

		那珂川		室見川	
		出会い橋	那珂川遊歩道	河川敷公園	室見駅付近
利用頻度 (回)	毎日	5	1	17	11
	週1-3	5	3	7	14
	月1-3	10	9	2	3
	月1回未満	20	17	4	2
利用目的	通過	15	9	6	5
	散歩	2	5	20	15
	休憩 時間待ち	6	24	10	1
施設との距離 (km)	0-3	5	7	26	27
	3-5	6	5	1	9
	5以上	19	18	3	0
大濠公園と どちらを 好むか	大濠	11	14	8	5
	室見施設	14	8	17	20
	その他	5	8	5	5